

ヨーロッパの旅

——再びドイツにもどって——

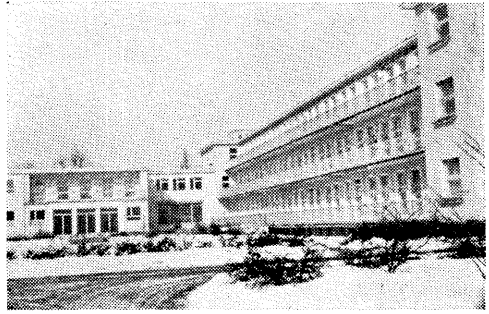
平井信義

ドイツ人が時間に几帳面であることは、すでに知られているところであるが、私の初めに在籍したフランクフルト大学のテルッダー教授などは、毎日の講議にせよ、医局の集まりにせよ、定刻から三〇秒内外の差をもって現れてくるのであった。

今でも思い出す。朝、大学につくと、先ず時計を合わせる。私の配属された病室は、朝の集まりの部屋からかなり離れた所にあつたから——と思い起こしながら、「かなり」という表現がすでにドイツ人の神経には合わないもので、普通に歩いて五分とか、三百メートルの距離のところとか、医局の友人に言われたのを思い出す。その道は、病室を出ると雑木林の中を通り、曲りくねって続いていたが、冬の寒い朝などは、白衣の上にさらに厚いマントを羽織つて、その道のりを歩いていった。そして歩きながらも時計を幾度か気にする。セコンドの刻みを耳に当てて確かめることもある。そして、足を速めたり遅くしたりコントロールしながら、九時一分前に教室の前の廊下に到着する。それとほとんど時間を同じくして、教授室

の扉があいて、二、三十人い並ぶ医局員の前を、のしっのしつと教授は歩きながら、目で挨拶を交しながら、教室へ乗り込むのであった。初めは、時間を追っているようで、何となく落ちつかない気持がしたけれども、慣れるに従つて、九時を目標とした自分の行動の計画が成り立ち、それにリズムさえも出てくるのを知った。ふと、時計を見ることがあると、それがちょうどいつもと同じ仕事をしている時であつたりして、生活のリズムがいよいよ板についたという感じがしたのを思い出す。

大学は真冬でも八時十五分に始まつた。八時十五分になると、方々のトアから医者も看護婦も検査者も一斉にとび出してくる。そしてそれぞれの仕事を始めるのである。それも、定刻より一分とちがわない程であつた。そして、せつせと自分の仕事を運営していく。八時十五分といえは、ドイツの真冬などはまだうす暗い時刻である。殊に霧の深い日には、病院は灯をともしさなくては仕事が出来ない程になる。しかし、それでも八時十五分という時刻は厳重に守ら



れている。

十五分という半ばな時間については、大学の特権という事になっていて。つまり、定刻は八時という事になってるのであるが、大学につとめる職員は十五分だけは遅刻をしてもよいという特権を与えられているわけである。これを、大学の以時間 (University's interval) とわれわれは呼んでいる。

こうした時間の正確さは、大学だけではない。友人の家に呼ばれた時にも、そこに集まってくる幾組かの家族が到着するのは、約束した時間から十分内外しか差がなかった。ほとんど期せずして——ということばで表現したくなるほど同時に、玄関先へ二、三組の夫婦が集まったこともある。

こうした時間を守る習慣は、何もドイツ人だけの話ではない。我が国にいるアメリカ人の友人なども、約束した時間にほとんどたがうことはないし、十五分遅れても、きちんと電話をかけてきてくれる。

時間にルーズな人たちの多い我が国に比べると、そうしたドイツで

の生活について話をするときさえも気がひける位にルーズであり、そのルーズなことを楽しんでいる点もある程である。客を呼んでも、約束した時刻に一時間位おくられて来る人はザラにあるし、講演に呼ばれても、二十分や三十分遅れるのは何とも思っていない。それが当然であり、その当然を見越して、皆もゆっくり来るという状態。定刻を守ろうと息せき切つて来たり、円タクを奮発して馳せ参じて、「何だこんなことなら」という失望感に打たれることは、しよつ中のこと。最近も地方のある部落に講演にいった時には、挨拶をするはずの役人が一時間十分も遅れ、その間、講師の私が実にイライラした気持で徒らに煙草の煙をふかしたことであった。こうした時間に対する無神経さが、どうして養われてしまっているのだろうか。子どもの教育の中で何が不足している結果であろうか。

夕方、私はよく散歩した。五月のドイツは最も散歩にはよい。酷しい真冬から開放されて、木の芽の青さが増し、ほころび、そして花が咲き始める頃なのである。歩道のない道はないから、乗物に無



ローラースケートを楽しんでいる子どもたち



用の注意を払う必要はなかったし、近くの森(Sadunath)にいけば、そこには散歩だけが認められる道が続いていたから、散歩の楽しさは格別であったし、ドイツ人が夫婦で手をつないで三三五五、散歩している姿は、そこそこで認められた。

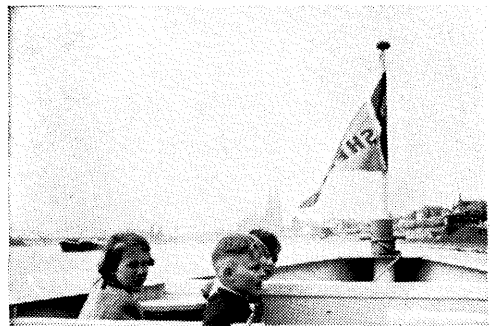
子どもたちも、町の歩道や、森の中の空地で遊んでいた。我が国ほどではないが、こちらに一とかたまり、あちらに一とかたまりと子どもはずいぶんたくさん目にとまった。彼らはフットボールをしたり、バトミントンをしたり、幼い子どもはスケートをしたり、あるいは玄関先でおままごとをしたり、石蹴りをしていたりしていた。

しかし、五時近くなると、そうした子どもたちの集団の傍を通るたびに、子どもひとりから「失礼ですが、今、何時でしょう」ときかれたものである。「四時四十五分だよ」と答えると、「ダンケゼア」と礼をのべて、「おおい、あと十分遊べるぞ」などと他の子どもたちも報告している。家に帰る

時間がきっちり決められているのであった。子どもたちの生活は活気に溢れているから、時計を持たせてあげておくにこわしてしまおうであろう。しかし時間はきっぱりと守らなければならぬ。そこで、通りすがりの人に時間をきくのである。そして、母親から言われた時間までに家に帰る努力をするのである。

家庭でも、食事の時間がきっちりきまっている。しかも、どこの家でもほぼ共通で、商売をしているお店でさえ、七時ともなればガラガラと鉄の錠戸をおろして閉めてしまう。そして、家中での食事を楽しむのである。したがって、七時少し前の買物は実にせわしい。錠戸もまた、定刻にしまっってしまうからであった。

こうした社会の動きは、もちろん、経済の根が深いことにも由来する。そこで商家でさえも七時という定刻を守れることになるわけだし、それが夕食を一家団らんの中であるという家庭の大切な営みを守ることもなるし、子どもにもきっぱりと時間を守ることが、



ライン河畔の船で楽しむ子どもたち

自他の幸福を守ることだということを知ってもらうことにもなっているのである。しかし、家庭の営みを大切に守るといふ気持ちに徹すれば、社会をも動かすことになるのではなからうか。その要求が出てこない我が国の状態は、家庭というものの困らんの楽しさを味わっていないことに起因しているのではなからうか。「日本には、本当の意味での家庭というものがあるでしょうか」とはあるアメリカ人が私にいつてくれたことばであるが、一家揃で一日のうち一回は食事をしながら談笑する家庭が、一体どの位の%にあるものであろうか。そういう努力はすべし、断念している両親も少なくない。子どもにしても、その楽しみを味わわないで成長していく。そして、同じことを繰り返すような人間にたつてしまふ。この悪循環は、まだまだ続きそうで、この悪循環をたち切るいい方法はないだろうか。

あるドイツの婦人から言われたことがある。「日本の家庭へ子どもを遊びに出して困ることは、お願いした時間に帰して下さらないことです。私どもにも食事の時間があるように、相手の家だつて時間があるでしょうに」

こうした点で、我が国の親たちの神経は、欧米の婦人の神経といささかちがっている。すなわち、欧米の場合には、相手の母親から言われた時間に子どもを帰すのが、その母親に対する誠意と考えるのに、我が国では、子どもがもつと遊んでいたいというと、子どもの要求を通すことを、子どもに対する誠意だと考えてしまうのである。

る。

「おばちゃんがお母さんにいつてあげますから、もつと遊んでいらつしやい」

こうしたことばが残っている限りは、我が国の子どもが自己抑制をしたり、時間で行動することを学んでいくことは不可能であると思う。そして、自分の時間、家庭の時間を守ることに對する要求は生まれてこないのではないかと心配である。

暮れかかる太陽を背にして元氣よく遊んでいるドイツの子どもたちを、もう一度思い浮かべてみよう。石蹴りをしている子、ままごとをしている子、ローリースケートを操っている子、フットボールをしている子、これらの子どもの集団が、町の歩道にも、木の茂つた空地にも、シュタットワルトといわれる公園の中にも、嬉々として遊んでいる。それを眺めながら、通りすぎていく日本人に向かつて、

「おじさん、今、何時でしょう」

と、その中のひとりの子どもがたずねるのである。そのおじさんはワイシャツの下から腕時計を出して、

「今は、五時二十分まえだよ」「十五分前だよ」「十分前だよ」と、五時近くなるまで、彼らに教えながら、散歩を楽しんでいる。

このような時が我が国にくるのは、一体いつのことであらうか。